

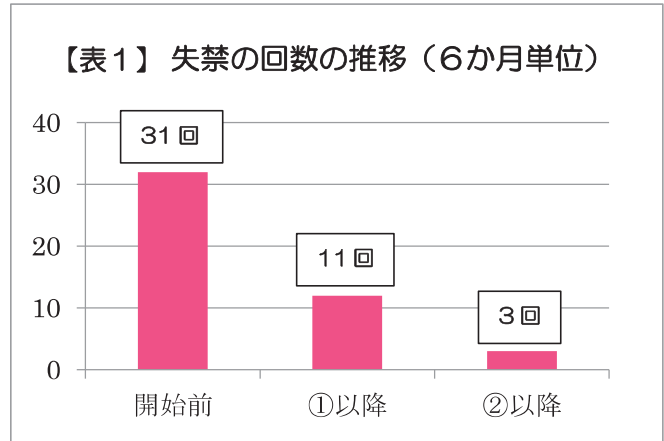
(2) 取り組み

① 選択の機会をつくる

やりたくない活動や作業を行っていることが推察されたため、Aさんが“本当は何かやりたいのか”を知るために“選択の機会”をつくることにしました。Aさんの簡易的なスケジュール(図1)を作成し、午前と午後で分け、Aさんがやりたい活動を選んでもらうようにしました。

これまでは軽作業を行うことが多かったのですが、午前中は軽作業、午後は文字合わせのパズルの課題を選ぶようになりました。もともと難解な漢字も読めるため、文字合わせはAさんにとって好きな活動の1つだったと考えられます。

取り組みの結果、取り組み開始前6カ月間に31回あった失禁が、取り組み後は6カ月で11回と、失禁回数の減少がみられました(表1)。



4. 考察

Aさんは指示への理解もあることから、トイレに行くタイミングを指示すれば失禁が減少するだろうと、これまで考えられてきたように思います。

また、作業能力や身辺面での自立度も高いことから、作業に従事することが、Aさんにとってより良い生活につながると考えられ、本人の意思を確認することなく、職員が作業活動を提供していたのではないかと考えます。

しかし、失禁という行動は“注目をしてほしい”のではなく、Aさんが「嫌」と言えない表出の難しさや、Aさんの意図しない活動や作業への“拒否”の表現であったのではないかと考えます。

“選択の機会”をつくることや、必要な情報の提供によって、“自分で選択した見通しのある過ごしやすい生活”を送ることができるようになり、結果として、“拒否”の表出と思われる失禁の回数が減少したのではないかと考えます。

5. まとめ

これまでAさんは、指示を受けることが多く、“自分で活動を選択する機会”は少なかったように思います。Aさんと同じように、表出が少ないことで、選択の機会がないまま過ごしている方も多いかもしれません。

今回、Aさんの“やりたいこと”に着目し、自己決定を促すために、“選択の機会をつくること”や“活動の見通しを持ってもらう”などを実践をしたことで、自発的な行動につながったのではないかと考えます。

支援者は、本人が自己表現できるように信頼関係を築き、表出される行動を“問題”としてではなく、“行動の意味”や“本人の表現”として理解し、「〇〇さんはこうしたいのではないかと、本人の意思を推測して受け止めることが大切です。

今後も本人主体の生活の実現に向けて、表出の少ない方の“言葉や行動の意味”を推測しながら、意思を読み取り、自己決定をサポートしていきたいとします。



【図1】Aさんのスケジュール

② 見通しを持ってもらう

選択の機会を提供したことで、失禁回数は減少しましたが、検診などの“普段とは違う活動”があると、失禁が起こることが確認できました。そこで、Aさんにあらかじめ“活動の見通し”を持ってもらい、“納得して参加してもらうこと”を目的に、Aさんが参加する行事の月間予定表をAさんの見える位置に置くようにしました(図2)。

れいわ ねん びつ ぎょうじよていひびょう
令和4年6月 行事予定表

| | | |
|----|---|-------------|
| 8 | 水 | 10時研修 |
| 9 | 木 | スポーツ |
| 10 | 金 | |
| 11 | 土 | |
| 12 | 日 | |
| 13 | 月 | |
| 14 | 火 | |
| 15 | 水 | |
| 16 | 木 | 地域連携交流、スポーツ |

【図2】Aさんの月間行事予定表(一部抜粋)

開始初日は、職員がAさんに説明して確認しながら1日のスケジュールを作成していましたが、翌日には、Aさん“自らで行事の予定表を見ながら作成”するようになりました。また、週末に家に持ち帰る物も予定表で示すと、指示がなくても、“自分で確認し準備できる”ようになりました。

排尿の支援として行っていたタイマーを使って、自主的にトイレにも行くようになり、この“活動の見通しを持ってもらう”取り組み以降、失禁の回数は6カ月でさらに3回と減少しました(表1)。